

サンスクリット原文で 『般若心経（大本）』を読む

大崎 正 瑠

Reading the Prajnaparamita Heart Sutra (larger version)
in Sanskrit original

OSAKI Masaru

目次

1. はじめに
2. サンスクリット原文
3. 語句解説
4. 日本語訳の試み
5. 英語訳の試み

1. はじめに

『般若心経』には、小本と大本の2種類あるが、小本は、紀元後2-4世紀頃、大本は、紀元後4-8世紀頃書かれたと推定される。本稿においては大本を扱う。大本は、分量にして小本の2倍近くあり、小本とは異本である。また小本を読む際の参考資料として重要である。小本では、鳩摩羅什訳（412年）、玄奘訳（649年）、不空訳（8世紀）が知られている。日本では玄奘訳が一番知られている。一方大本では、法月訳（739年）、般若・利言訳（790年）、法成訳（856年）、智慧輪訳（860年頃）、施護訳（980年）などが知られている。小本と大本の訳された年代の違い、小本を訳した鳩摩羅什や玄奘が大本を訳していないことなどから、大本は後から作られたと見るのが妥当であろう。内容については、特に両者に矛盾するところはない。なおテキストは、原則としてMax Müller¹⁾が奈良長谷寺に伝わった写本などに基づき校訂したものを中村元がさらに訂正した校訂テキストに依る（一部微修正）。本稿の日本語訳は、原典からの直訳であるので、中には漢訳文経由の訳と違う訳が出て、それは自然の成り行きであり、仕方がない。若干の例外を除き、できるだけ現代日本社会で使用さ

サンスクリット原文で『般若心経（大本）』を読む

れる分かり易い表現に努めた。

2. サンスクリット原文

namas sarvajñāya. evam mayā śrutam. ekasmin samaye bhagavān Rājagṛhe viharati sma
Gṛdhrakūṭe parvate mahatā bhikṣusaṃghena sārdhaṃ mahatā ca bodhisattvasaṃghena.
tena khalu samayena bhagavān Gambhīrāvasaṃbodhaṃ nāma samādhiṃ samāpanaḥ.
tena ca samayenāryāvalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattvo gaṃbhīrāyāṃ prajñāpāram-
itāyāṃ caryāṃ caramāṇa evaṃ vyavalokayati sma. pañca skandhās tāṃs ca svabhāva-
śūnyān vyavalokayati. athāyusmān Chāripuro buddhānubhavenāryāvalokiteśvaraṃ
bodhisattvam etad avocat. yaḥ kaścit kulapuro gaṃbhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ
caryāṃ cartukāmaḥ kathaṃ śikṣitavyaḥ. evam ukta āryāvalokiteśvaro bodhisattvo
mahāsattva āyusmaṃtaṃ Śāriputraṃ etad avocat. yaḥ kaścic Chāripura kulapuro vā
kuladuhitā vā gaṃbhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ cartukāmas tenaivaṃ
vyavalokayitavyam. pañca skandhās tāṃs ca svabhāvaśūnyān samanupaśyati sma.
rūpaṃ śūnyatā śūnyatāiva rūpaṃ. rūpān na pṛthak śūnyatā śūnyatāyā na pṛthag rūpaṃ.
yad rūpaṃ sā śūnyatā yā śūnyatā tad rūpaṃ. evaṃ vedanā-saṃjñā-saṃskāra-vijñānāni ca
śūnyatā. evaṃ Śāripura sarvadharmāḥ śūnyatālakṣaṇā anutpannā aniruddhā amalāvimalā
anūnā asaṃpūrṇāḥ. tasmāt tarhi Śāripura śūnyatāyāṃ na rūpaṃ na vedanā na saṃjñā
na saṃskārā na vijñānaṃ. na cakṣur na śrotraṃ na ghrāṇaṃ na jihvā na kāyo na mano
na rūpaṃ na śabda na gaṃdho na raso spraṣṭavyaṃ na dharmāḥ. na cakṣurdhātur yāvan
na manodhātur na dharmadhātur na manovijñānadhātuḥ. na vidyā nāvidyā na kṣayo
yāvan na jarāmaraṇaṃ na jarāmaraṇakṣayaḥ. na duḥkhasamudaya-nirodhamārgā na
jñānaṃ na prāptir nāprāptiḥ. tasmāc Chāripura aprāptitvena bodhisattvānāṃ
prajñāpāramitām āśritya viharaty acittāvaraṇaḥ. cittāvaraṇanāstitvād atrasto
viparyāsātikrāṃto niṣṭhanirvāṇaḥ. tryadhvavyavasthitāḥ sarva-buddhāḥ prajñāpāramitām
āśrityānuttarāṃ samyak-saṃbodhim abhisambuddhāḥ. tasmāj jñātavyaḥ
prajñāpāramitāmahāmaṃtro mahāvidyā-maṃtro 'nuttaramaṃtro 'samasaṃmamaṃtraḥ
sarvaduḥkhaṃprasāmanamaṃtraḥ satyam amithyatvāt prajñāpāramitāyāṃ ukto maṃtraḥ.
tad yathā, gate gate pāragate pāra-saṃgate bodhi svāhā, evaṃ Śāripura gaṃbhīrāyāṃ
prajñāpāramitāyāṃ caryāyāṃ śikṣitavyaṃ bodhisattvena. atha khalu bhagavān tasmāt
samādher vyutthāyāryāvalokiteśvarasya bodhisattvasya sādhu-kāram adāt. sādhu sādhu
kulaputra evam etad kulaputra. evam etad gaṃbhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryaṃ
cartavyaṃ, yathā tvayā nirdiṣṭam anumodyate tathāgatair arhadbhiḥ. idam avocad

bhagavān ānaṃdamaṇaḥ. āyuṣmān Chāriputra āryāvalokiteśvaraś ca bodhisattvaḥ sā ca sarvāvātī parśat sadevamānuṣāsura gaṃdharvaś ca loko bhagavato bhāṣitam abhyanaṃdann itī prajñāpāramitāhṛdayasūtraṃ samāptaṃ.

〈中村・紀野（2011）『般若心経・金剛般若経』 pp. 189-191〉

3. 語句の解説と試訳

状況としては、観自在菩薩が、修行の実践中に見極めたことを、傍で瞑想している釈尊の代弁者として、シャリプットラに順次説いている。

なおここで用いた略語は次の通りである。m. : 男性, f. : 女性, n. : 中性, sg. : 単数, pl. : 複数, N. : 主格, Ab. : 奪格, L. : 処格, adj. : 形容詞, adv. : 副詞, pron. : 代名詞, pp. : 過去受動分詞, pref. : 接頭辞, prep. : 前置詞, suf. : 接尾辞, √ : 語根

❖ namas sarvajñāya.

【試訳】 全知の人に礼。

namas は, namas-(n.) 「礼」「敬礼」で不変化。すなわち数・格により変化しない。namas は, インドなどで一般的に行われている挨拶の namaste の中にある。これは, namas 「敬礼」「服従」+ te 「あなたに」(第2人称・単数・為格)の組み合わせである。実際には, 両手を合わせ, 指を上に向けて軽く会釈をする。日本でも仏前で行う。

sarvajñāya は, sarva-(n.) 「すべてのもの」+ jñā-(adj.) 「知っている(人)」で, 合わせて, sarvajña-(adj.) 「全知の(人)」の男性・単数・為格である。

❖ evam mayā śrutam.

【試訳】 このように私は聞いた。

evam は, 副詞で「このように」。mayā 「私により」は, 第1人称・単数・具格の代名詞である。śrutam は, √sru- 「聞く」+ ta (過去受動分詞を作る接尾辞)で, śruta 「聞かれた」の中性・単数・主格。直訳は「私によって聞かれた」だが, 能動態のように訳してみる。「私」は, この大本の著者ということになるだろうが, 不明である。

❖ ekasmin samaye bhagavān Rājagṛhe viharati sma Gṛdhrakūṭe parvate mahatā bhikṣusaṃghena sārđhaṃ mahatā ca bodhisattvasaṃghena.

【試訳】 ある時世尊は, ラージャグリハ近くの霊鷲山に, 大勢の修行僧達および大勢の菩薩達とともに居られた。

ekasmin 「ある」は, 数詞 eka- 「一」の男性・単数・処格。samaye は, samaya- 「時」

サンスクリット原文で『般若心経（大本）』を読む

の男性・単数・処格。合わせて「ある時」で、英語の once や at one time に相当する。

bhagavān は、bhagavat-「世尊」「崇高なる、聖なる（人）」の男性・単数・主格。

Rājagṛhe は、かつてのマガダ王国の首都 Rājagṛha「ラージャグリハ」の中性・単数・処格形である。漢訳では「王舎城」。分解すれば Rāja + gr̥he であるが、Rāja は Rājan-(m.)「王」から語尾 -n が脱落した。gr̥he が gr̥ha「家」の中性・単数・処格である。

viharati は、vi-(pref.)「離れて」+√hr̥-「取る」「奪う」だが、合わせると「住む」「暮らす」という意味となる²⁾。単数・第3人称・能動態である。sma は、現在形に付けて過去を表す副詞。

Gr̥dhṛakūṭe は、Gr̥dhṛakūṭa-「グリッドウフラータ」の男性・単数・処格。parvate は、parvata-「山」の男性・単数・処格。インド東北部ガンジス川の南側にある山で、鷲の形をした岩がある修行場として知られる。上記「ラージャグリハ」の近くにあり、世尊が好んで瞑想・説法をした場所である。漢訳では「靈鷲山（りょうじゅせん）」または、音訳で「耆闍崛山（ぎじゃくっせん）」の名前がある。

mahatā は、mahat-(adj.)「大勢の」男性・単数・具格。bhikṣusam̐ghena は、bhikṣu + sam̐ghena で、bhikṣu「比丘」は、「出家した修行僧」で、実際には「托鉢僧」「乞食僧」で修行中の僧のこと。sam̐ghena は、sam̐gha-「僧伽」「衆」の男性・単数・具格で、これは教えを継ぐ人々の「集会」「集団」のこと。内容は複数だが、形式上は単数で表す。英語の audience「聴衆」、crowd「群衆」、committee「委員会」などに似ている。sārdham (prep.) は、「共に」（具格を伴う）。ca「および」は、接続詞。

bodhisattvasam̐ghena は、bodhisattva「菩薩」+sam̐gha「衆」で男性・単数・具格。「菩薩」は、「求道者」「悟りを求めて修行中の者」のこと。

❖ tena khalu samayena bhagavān Gaṃbhīrāvasam̐bodham nāma samādhiṃ samāpannaḥ.

【試訳】 実にその時、世尊は深遠な悟りと呼ばれる瞑想に入った。

tena は、指示代名詞 tad-「その」の男性・単数・具格。khalu(adv.)「実に」「まさに」。samayena は、samaya-「時」の男性・単数・具格。bhagavān「世尊」は、上述。Gaṃbhīrāvasam̐bodham は、Gaṃbhīra(adj.)「深い」+avasam̐bodham で、avasam̐bodham は、ava-(pref.)「遠離」+sam̐-(pref.)「強意」+bodhi「悟り」の男性・単数・対格。この3語合わせても「悟り」と解する。nāma は、副詞で「～と呼ばれる」。

samādhiṃ は、samādhi-「瞑想」の男性・単数・対格。samāpannaḥ は、sam-「強意」+ā-(pref.)「～の方に」+√pad-「落下する」の過去受動分詞で、samāpanna-「～に入った」の男性・単数・主格。全体で「瞑想に入った」。

❖ tena ca samayenāryāvalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattvo gaṃbhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ caramāṇa evaṃ vyavalokayati sma.

【試訳】 するとその時、聖なる観自在菩薩摩訶薩は、深い般若波羅蜜多の時に修行を実践しながら、このように見極めた。

tena「その」、ca「そして」および samayena「時」については、既に上で述べた。

samayenāryāvalokiteśvaro は、samayena + āryāvalokiteśvaro である。āryāvalokiteśvaro は、ārya-(adj.)「聖なる」「高貴な」「尊敬すべき」+ava-(pref.)「遠離・下方」+lokita-(pp.)「見た」+īśvara-(adj.)「能力のある」で、avalokiteśvara- は、「世界を自在に見渡した能力のある(人)」すなわち「観自在」の男性・単数・主格である。

bodhisattvo は、bodhisattva-「菩薩」の男性・単数・主格である。これらの語の語尾は、共に連声して -as+ (有声子音) >o と変化した。mahāsattvo は、mahā+sattvo である。mahā は、mahat(adj.)「偉大な」の複合語形。sattvo は、sattva-「生けるもの」「存在するもの」の男性・単数・主格。合わせて「摩訶薩」。摩訶薩とは、「偉大な人」の意味で、菩薩の尊称。全体で「観自在菩薩摩訶薩」で、男性・単数・主格。

gaṃbhīrāyāṃ は、gaṃbhīra-(adj.)「深い」の女性・単数・処格。prajñāpāramitāyāṃ は、prajñāpāramitā-「般若波羅蜜多」の女性・単数・処格である。処格には時・場所・状況などを表す色々な機能があるが、ここでは「～の時に」と解釈する。前半の prajñā-(f.)「智慧」は、pra-(pref.)「前に」+jñā-(adj.)「知っている」で、悟りに必要な「英知・見識」のこと。後半の pāramitā には2説あり、① pārami-tā : parama-(adj.)「最高の」の女性形 + tā (抽象名詞を作る接尾辞)で「完成」、② pāram-i-tā : pāra-(adj.)「向こうへ」(副詞的用法) + itā (√i-「行く」の過去受動分詞 ita-の女性形)で、「到彼岸」。すなわち prajñāpāramitā-(f.) は、「智慧の完成」または「智慧の到彼岸」という意味だろう。これらは結局智慧による「悟りの達成」のことである³⁾。ここでは発音が原語に近い「般若波羅蜜多」としてみる。「悟りの達成」に実践すべき倫理としては、六波羅蜜・十波羅蜜がある。

caryāṃ は、caryā-(f.)「実行」「行為」の女性・単数・対格で、√car-「動く」「実行する」に由来する。caramāṇo は、√car-由来の carati から ti を取り、接尾辞 -māna(suf.) が加わった現在分詞 caramāṇa-「実践している」の男性・単数・主格である。語尾が、連声して -as+ (有声子音) >o と変化した。caryāṃ と合わせて「諸修行を実践している」という意味となる。これに過去を表す sma が付加された。

evaṃ は、副詞で「このように」「まさに」。vyavalokayati は、vi-(pref.)「離れて」が、異なる母音の前で連声して vy になった。ava-(pref.) は、「遠離・下方」、lokayati は、√lok-「見る」の使役活用語幹 lok+aya>lokaya の単数・第3人称・現在形で、合わせて vyavalokayati は「見極める」という意味となる。使役の意味は、失われていると見られる。これに過去を表す sma が付加された。

サンスクリット原文で『般若心経（大本）』を読む

❖ pañca skamdhās tāṃs ca svabhāvaśūnyān vyavalokayati.

【試訳】 五つの要素がある。そして彼は、それらがその本性において空であると見抜いた。

pañca-(card.) は、「五」。skamdhās は、skamdhā- の男性・複数・主格。意味は、「肩」「肩の重荷」「集塊」「木の幹」などである。一般的には人間の世界を構成する「要素」で、煩惱の元になる。五つの要素とは、ここでは後述の物質・感覚作用・知覚作用・意志作用・認識作用を言う。tāṃs は、連声により tān + (ca) > tāṃs と変化した。tān は、指示代名詞 tad- 「それ」の男性・複数・対格である。ca は英語の and に相当するが、位置が異なる。

svabhāvaśūnyān は、svabhāva + śūnyān である。svabhāva- は、sva-(adj.) 「自分の」「自体の」+ bhāva-(m.) 「存在」で、全体としては「本性」「自性」「実体」などの意味である。bhāva の語根は、√bhū- 「～となる」「ある」である。

śūnyān は、śūnya-(adj.) 「空」の男性・複数・対格である。日本語訳はこれ以外にも考えられるが、主要な国語辞典によれば、「空」は、今や仏教用語として日本語にもなっている。内容は、「世の中すべてのものは、因縁によって仮にできたもので永久不変の実体や自我はない」というもの（『大辞泉』）。「空」は、仏陀の涅槃から 400 年ほどして大乘仏教が登場し、般若経や Nāgārjuna（龍樹，AD150-250 頃）が強調した。

vyavalokayati は、上で既に述べた。これは現在形であるが、主文の「見極めた」に合わせて過去形で訳してみる。

❖ athāyusmāñ Chāripuro buddhānubhāvenāryāvalokiteśvaraṃ bodhisattvam etad avocat.

【試訳】 そこで、長老シャリプトラは、仏の力によって聖なる観自在菩薩に次のように言った。

athāyusmāñ は、atha + āyusmāñ で、atha は、副詞で「そこで」「さて」。āyusmāñ は、āyusman- 「長老」の男性・単数・主格 āyusmān の語尾 -n が、次の語頭と連声して変化したもの。Chāripuro は、Śāriputra の男性・単数・主格。すなわち 2 語は、-n + Ś- > -ñ + Ch- と変化した。

buddhānubhāvenāryāvalokiteśvaraṃ は、buddha + anubhāvena + āryāvalokiteśvaraṃ で、まず buddha- 「仏」+ anubhāvena すなわち anubhāva 「力」の男性・単数・具格。

āryāvalokiteśvaraṃ は、āryāvalokiteśvara- 「聖なる観自在」の男性・単数・対格。bodhisattvam は、bodhisattva- 「菩薩」の男性・単数・対格。2 語合わせて「聖なる観自在菩薩」で、男性・単数・対格。

etad は、指示代名詞 etat 「これ」の単数・中性・対格が、連声して -t+ (有声音) > -d と変化した。これが副詞化して「次のように」となる。avocat は、√vac- 「言う」の第 3 人称・単数・アオリストで過去を表す。

❖ *yaḥ kaścīc kulaputro gaṃbhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ cartukāmaḥ katham śikṣitavyaḥ.*

【試訳】 誰であれ、立派な若者で深い般若波羅密多の時に修行をしたいと願った者は、どのように学んだらよいであろうか？

yaḥ は、関係代名詞 *yad-* の男性・単数・主格 *yas* の語尾が、連声して変化した。英語では関係代名詞幾つかのうち *who* が該当するだろう。*kaścīc* は、*kaḥ -cit > kaścīc* と連声したもの。*kaḥ* は、不定代名詞、*cit* は一種の「強調」で、*ever* に相当する。合わせて英語の *whoever* ないし *anyone who* に相当するだろう（後述の英訳参照）。

kulaputro は、*kulaputra* の男性・単数・主格である。*kula* 「種族」+ *putra* 「若者」であるが、*kulaputra* となると、手許の梵英辞典では *a son of a noble family*（「良家の若者」）とある。日本語では「立派な若者」、英語では *a decent lad* くらいになろうか⁴⁾。

katham は、疑問副詞で「どのように」不変化。*gaṃbhīrāyāṃ* は、*gaṃbhīra-* 「深い」の女性・単数・処格。*prajñāpāramitāyāṃ* は、*prajñāpāramitā-* 「般若波羅密多」の女性・単数・処格である。*caryāṃ* は、既に述べたように「実行」「行為」「修行」の意味である。*cartukāmaḥ* は、*cartu + kāmaḥ* で、*cartu* は、 $\sqrt{\text{car}}$ 「実行する」の不定詞 *cartum* の *-m* が脱落した。*kāmaḥ* は *kāma-* (adj.) 「～したい」の男性・単数・主格。これは所有複合語を形成し、*kulaputro* を修飾している。

śikṣitavyaḥ は、 $\sqrt{\text{śikṣ}}$ 「学ぶ」+ *itavya*（未来受動分詞を作る接尾辞）で、*śikṣitavya-* 「学ばれるべき」の男性・単数・主格。ここでは、「学ぶべき」と能動態のように訳してみる。

❖ *evam ukta āryāvalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattva āyusmaṃtaṃ Śāriputram etad avocat.*

【試訳】 このように言われて、聖なる観自在菩薩摩訶薩は、長老シャリプトラに次のように言った。

evam は、副詞で「このように」。*ukta* は、 $\sqrt{\text{vac}}$ 「話す」の過去受動分詞 *ukta-* 「言われた」の男性・単数・処格 *ukte* が、連声して *-e + (a 以外の母音) > -a* と変化した。これは絶対処格。*āryāvalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattva* は、「聖なる観自在菩薩摩訶薩」の男性・単数・主格。摩訶薩とは「偉大な人」「立派な人」の意味。*āyusmaṃtaṃ Śāriputram* は「長老のシャリプトラ」で男性・単数・対格。*etad* は「次のように」（上述）。*avocat* は、アオリスト（上述）。

❖ *yaḥ kaścīc Chāriputra kulaputro vā kuladuhitā vā gaṃbhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ cartukāmas tenaiṃ vyavalokayitavyam.*

【試訳】 シャリプトラよ、誰であれ、立派な若者あるいは立派な娘で深い般若波羅密多の時

サンスクリット原文で『般若心経（大本）』を読む

に修行をしたいと願った者は、このように見極めるべきである。

yaḥ は、上項で既に説明した。kaścic は、kaścit が、連声により -t + Ś->-c + C- と変化したもの。kulaputro は、上で既に述べた。vā は「または」「すなわち」である。kuladuhitā は、kula + duhitā で、「立派な娘」。英語では、「立派な若者」と同様、a decent lass くらいになろうか。gaṃbhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ cartukāmas については、上項で既に述べた。

tenaivaṃ は、tene + evaṃ で、tene は tad- の男性・単数・具格で「その者によって」。evaṃ は、副詞で「このように」。vyavalokayitavyam は、vi-(pref.) 「離れて」 + ava-(pref.) 「遠離・下方」 + √lok- 「見る」の使役活用語幹 vyavalokaya- に、最後の a を脱落させて、-itavya (未来受動分詞を作る接尾辞) を付加したもので「見極められるべき」の中性・単数・主格である。ここでは使役の意味は、失われていると見られる。原文は、受動態であるが、能動態のように訳してみる。

❖ pañca skandhās tāṃś ca svabhāvaśūnyān samanupaśyati sma.

【試訳】 五つの要素がある。そして彼あるいは彼女は、それらがその本性において空であると見抜いた。

語句の大半は、上で既に述べた。samanupaśyati は、sam + anu + paśyati で、sam-(pref.) は「強意」、anu-(pref.) は「後から」。paśyati は、√paś- 「見る」の単数・第3人称・現在形である。これに過去を表す副詞 sma が付加された。

❖ rūpaṃ śūnyatā śūnyataiva rūpaṃ.

【試訳】 物質は空性であり、空性とは物質に他ならない。

rūpaṃ は、rūpa- 「物質」の中性・単数・主格である。梵英辞典では「外観」「形態」「現象」「色彩」などの意味があるが、それぞれ「眼で見える物質の多様な状態」の一面を表しているにすぎない。一言「物質」で表現できる。ここでは人間の身体を暗示している。

śūnyatā 「空性」は、女性・単数・主格で「空なる性質」という意味である。漢訳文と異なり、梵語原文は、śūnya-(adj.) と śūnyatā-(f.) を区別している。śūnyatāiva は、śūnyatā + eva で、eva は、「他ならぬ」「実に」「まさに」で、直前の語を強調する副詞。

❖ rūpān na pṛthak śūnyatā śūnyatāyā na pṛthag rūpaṃ.

【試訳】 空性は、物質と別々ではない。また物質は、空性と別々ではない。

ここでは、主語は śūnyatā と rūpaṃ で、rūpān と śūnyatāyā は奪格である。rūpān は、rūpāt(n.sg.Ab.) が、連声により -t + n->-n + n- と変化したもの。na(adv.) は、否定を表し、pṛthak(adv.) は、「別々」「離れて」の意味である。

❖ yad rūpaṃ sā śūnyatā yā śūnyatā tad rūpaṃ.

【試訳】 物質なるもの、それは空性である。空性なるもの、それは物質である。

yad と yā は、関係代名詞で、ともに英語の what などに訳し得る。sā と tad は、指示代名詞である。yad と tad は、中性・単数・主格の yat と tat が連声により変化したもの。yā と sā は、女性・単数・主格である。梵語の関係代名詞の構文は、基本的には yad- 節（従属節）と tad- 節（主節）が組み合わされ構文を作る。

❖ evaṃ vedanā-saṃjñā-saṃskāra-vijñānāni ca śūnyatā.

【試訳】 このように感知作用・知覚作用・意志作用・認識作用もまた空性である。

evaṃ は、副詞で「このように」「まさに」。vedanā-saṃjñā-saṃskāra-vijñānāni は、前の単数形3語と最後の複数形1語で並列複合語を形成している。感覚器官（眼・耳・鼻・舌・皮膚・心：六根）が、未知のもの（六境）に出会い何らかの刺激を受けて、自分の意志を確立し、はっきり「認識」するまでの四段階をいう。自分が自分であることを確かめられる作用である。それぞれ分解してみよう。

vedanā-(f.) は、語根が√vid-「知る」で、「苦痛」「感覚」の意味だが、最初の刺激を受ける「感知作用」のことをいう。saṃjñā-(f.) は、saṃ-(pref.)「完成」「共存」+jñā-(f.)「理解すること」、合わせて「意識」で、刺激の「知覚作用」のことをいう。saṃskāra-(m.) は、saṃskāra>saṃ+s+kāra-で、saṃ-(pref.)が「完成」「共存」を表し、-s-は特別の意味を表す時に挿入される。kāra-(m.)「行為」「行動」は、語根が√kr-「実行する」「作る」である。合わせて「一緒にすること」「完全にすること」「洗練すること」、すなわち行動にもつながる心の「意志作用」である。vijñāni は、vijñāna-「認識」「識別」「判断力」の中性・複数・主格で、総合的な判断や記憶・行動を伴う「認識作用」をいう⁵⁾。

❖ evaṃ Śāriputra sarvadharmāḥ śūnyatālakṣaṇā

【試訳】 シャリプトラよ、このようにあらゆるものは、空性という特徴をもつ。

evaṃ は、副詞で「このように」「まさに」。次にテキストの sarvadharmā は、sarvadharmāḥ の誤りであろう。この -ḥ は、無声音の前では省けない。sarva-(adj.) は、「すべての」。dharmāḥ は、dharma-「もの」の男性・複数・主格。語尾の -s が、ś の前で絶対語末形の -ḥ に変化した。語根は√dhr-「保持する」である。一般的な意味としては「保持されるもの」で、すなわち dharmin-(m.f.n.)「保持する者」が持つものである。これには幾つかの意味がある。①有形無形の存在・事物、②性質・性格・特性・特質・属性、③仏教の礼儀、④永久不変の真理・道理、⑤正義・公正、⑥秩序・道徳・慣習・規範・法律・宗教・仏陀の教説、等々。ここでは①に該当する。sarvadharmā- は、全体で「あらゆるもの」を表す。

サンスクリット原文で『般若心経（大本）』を読む

śūnyatā-(f.) は、「空性」。lakṣaṇā-(adj.) 「～の特徴をもつ」は、語根が √lakṣ- 「明記する」「表示する」である。語尾の -ḥ が、有声音の前で脱落した。lakṣaṇa- は本来中性であるが、この2語で所有複合語となり、sarvadharmāḥ を説明するので、全体で男性・複数・主格となる。

❖ anutpannā aniruddhā amalāvimalā anūnā asaṃpūrṇāḥ.

【試訳】 それらは生ずることもなく滅ぶこともない。汚れていることもなく浄いこともない。滅することもなく増えることもない。

anutpannā は、an-(pref.) 「否定」+ ut-(pref.) 「外に」+ √pad- 「落下する」の過去受動分詞で、anutpanna-(adj.) 「生じない」の男性・複数・主格。有声音の前で語尾の -ḥ が脱落した。ut- は、ud- が無声音の前で変化した。

aniruddhā は、a-(pref.) 「否定」+ ni-(pref.) 「下方に」「中に」+ √rudh- 「妨げる」「阻む」+ ta (過去受動分詞を作る接尾辞) で、aniruddha-(adj.) 「滅ばない」の男性・複数・主格。語尾の -ḥ が、有声音の前で脱落した。意味は「障害のない」「支配されない」「自由意志のある」であるが、ここでは「滅ばない」の意味と解する。

amalā は、a-(pref.) 「否定」+ mala-(adj.) 「汚れている」の男性・複数・主格で、語尾の -ḥ が脱落した。avimalā は、a+vi+malā で、a は「否定」、vi-(pref.) は、「離れて」を表し、この malā も、男性・複数・主格で、語尾の -ḥ が、有声音の前で脱落した。意味は「汚れを離れていることもない」。

anūnā は、an- 「否定」+ ūnā である。ūnā は、ūna-(adj.) 「欠けている」の男性・複数・主格で、語尾の -ḥ が、有声音の前で脱落した。全体としては「減らない」。

asaṃpūrṇāḥ は、a-(pref.) 「否定」+ saṃ-(pref.) 「強意」+ √pr- 「満たす」の過去受動分詞で、asaṃpūrṇa- 「満たされない」「増えない」の男性・複数・主格。語尾の -s が、絶対語末で -ḥ となる。

❖ tasmāt tarhi Śāriputra śūnyatāyāṃ na rūpaṃ na vedanā na saṃjñā na saṃskārā na vijñānaṃ

【試訳】 シャリプトラよ、それ故にその時空性においては物質はなく、感知作用・知覚作用・意志作用・認識作用もない。

tasmāt 「それ故に」は、指示代名詞 tad- の中性・単数・奪格。奪格で理由を表す（副詞化）。tarhi は、副詞で「その時」。śūnyatāyāṃ は、śūnyatā 「空性」の女性・単数・処格、rūpaṃ は、rūpa- 「物質」の中性・単数・主格。「否定」を表す na を前につけて「物質はない」。

vedanā, saṃjñā, saṃskārā, vijñānaṃ については、ほぼ既に上で述べた。saṃskārā を

除いて3語は、単数・主格であるが、saṃskārāだけが複数である。その理由は、この単語が通常複数形で使用されるからだろう。vijñānaṃ は、vijñāna-「認識」「識別」「判断力」の中性・単数・主格。これらの単語全部に否定を表す na がついている。

❖ na cakṣur na śrotram na ghrāṇaṃ na jihvā na kāyo na mano na rūpaṃ na śabda na gaṃdho na raso spraṣṭavyaṃ na dharmāḥ.

【試訳】 眼・耳・鼻・舌・身体・心もなく、物質・音・匂・味・触・心の対象もない。

cakṣur は、cakṣus-「眼」の中性・単数・主格の語尾が、連声により -s+（有声音）>-r と変化した。śrotram は、śrotra-「耳」の中性・単数・主格。ghrāṇaṃ は、ghrāṇa-「鼻」の中性・単数・主格。jihvā は、jihvā-「舌」の女性・単数・主格。kāyo は、kāya-「身体」すなわち「触覚器官」の男性・単数・主格。mano は、manas-「心」の中性・単数・主格。全ての単語の前に「否定」の副詞 na を付けている。結局以上のような感覚器官（六根）が全てないというもの。なお以上2語と以下3語の語尾は、いずれも連声して -as+（有声子音）>-o と変化した。

rūpaṃ は、rūpa-「物質」の中性・単数・主格。śabda は、śabda-「音」の男性・単数・主格。gaṃdho は、gaṃdha-「匂」の男性・単数・主格。raso は、rasa-「味」の男性・単数・主格。spraṣṭavyaṃ は、√spraś-「触れる」+tavya（未来受動分詞を作る接尾辞）で、spraṣṭavya-「身体で触れられるべきもの」「身体で触れて感じる対象」の中性・単数・主格。ここでは単に「触」とした。dharmāḥ は、dharma-「有形無形の存在」の男性・複数・主格 dharmās の語尾が、絶対語末で -ḥ となる。ここでは「心の対象」「心が感じる対象」と解する。ここでも全ての単語の前に「否定」の na を付けている。以上のような感覚器官が感じる対象（六境）もないというもの。

❖ na cakṣurdhātur yāvan na manodhātur na dharmadhātur na manovijñānadhātuḥ.

【試訳】 眼に映る世界はない。さらに心の世界もなく、心の対象の世界もなく、心の認識の世界に至るまでない。

cakṣur については、上で既に述べた。dhātur は、dhātu-「世界」の男性・単数・主格 dhātus が連声したもの。本来の意味は「要素」「成分」「層」であるが、さらに「領域」「世界」「存在」などにも広がる。これら2語は複合語を構成する。na「否定」が前にきて、全体として「眼に映る世界がない」となる。

yāvan は、関係副詞の yāvāt が、連声により -t+n->-n+n- と変化した。役割は、「～から～に至るまで」と前後の語句を繋げる。mano は、manas-(n.)「心」「知力」「思考」の語尾が、連声して -as+（有声子音）>-o と変化した。dhātur と合わせて「心の世界」。dharma-(m.)「心の対象」と dhātur と合わせて「心の対象の世界」。manovijñānadhātuḥ は、

サンスクリット原文で『般若心経（大本）』を読む

mano「心」と vijñāna-(n.)「認識」と dhātu-(m.)「界」3語の複合語で「心の認識の世界」である。男性・単数・主格の dhātus の語尾が、絶対語末で -ḥ となる。全ての語句の前に「否定」を表す na がついて、「心の認識の世界に至るまでない」。

❖ na vidyā nāvidyā na kṣayo yāvan na jarāmarāṇaṃ na jarāmarāṇakṣayaḥ.

【試訳】 悟りは、存在しない。迷いや煩惱も存在しない。これらがなくなることもない。さらに老いと死に至るまでない。老いと死に至るまでなくなることもない。

まず na vidyā は、na「否定」と vidyā-(f.sg.N.)「知識」で、合わせて「知識がないこと」すなわ「迷いや煩惱がある状態」となる。ここでの vidyā「知識」は、prajñā-「智慧」によって得た知識すなわち「悟り」と同義と解する。vidyā-の語根は、√vid-「知る」である。これは英語の wit、独語の wissen とともに共通の語源を有する。na vidyā「無明」は、人間の最も根本的な煩惱で、dvādaśāṅga-(n.)「十二縁起（因縁）」の中で最初に説明されている。十二縁起とは、人間が生まれてから老死に到る過程を12の段階で解き明かしたものの。また十二縁起は、生存のプロセスであるとともに、瞑想のプロセスでもあるという⁶⁾。

nāvidyā は、na「否定」+a「否定」+vidyā「知識」で、nāvidyā-「知識がないことはない」「迷いや煩惱がない」の女性・単数・主格。kṣayo は、kṣaya-「滅亡」「喪失」の男性・単数・主格 kṣayas の語尾が、連声して -as+（有声子音）>-o と変化した。これの対象は、書いてないが、前の2つの語句 na vidyā と nāvidyā と解する。

yāvan は、既述のように前後の語句を繋げる関係副詞。jarāmarāṇaṃ は、jarā-(f.)「老いること」+marāṇa-(n.)「死ぬこと」。複合語を構成し、全体としては中性・単数・主格である。前に否定の na が付いて「老いと死はない」。jarāmarāṇakṣayaḥ は、分解すると (jarā + marāṇa) + kṣayo(m.) の関係にあり、全体としては男性・単数・主格である。絶対語末で -s が -ḥ となる。これも na「否定」が付いて、「老いと死がなくなることもない」と続く。ここでは十二縁起の存在もまたその存在の消滅も否定されている。

❖ na duḥkhasamudaya-nirodhamārgā na jñānaṃ na prāptir nāprāptiḥ.

【試訳】 苦悩・根源・抑制・道筋は存在しない。知ることがなければ、得ることがない。得ないこともない。

na は、「否定」を表す副詞。duḥkha-(n.) は、「苦悩」「不安」「痛み」「苦難」「心配」「悲しみ」などの意味がある。samudaya-(m.) は、「収集」「集合」「結合」「原因」「根源」「元」などの意味がある。文脈的には「原因」「根源」の意味合いが強いと解する。

nirodha-(m.) は、ni+rodha で、ni-(pref.) は「下方に」、rodha-(m.)「阻止」は、√rudh-「阻む」「妨げる」と関連のある名詞である。これには「抑制」「征服」「制御」「克服」「阻止」などの意味がある。ここでは、「抑制」の意味合いが強いと解する。

mārgā は, mārga-「道筋」の男性・複数・主格 mārgās で, 次に有声音が来ると最後の -s が落ちる。梵英辞典などによれば「道筋」「道路」「捜すこと」「たどること」などの意味がある。理想の境地に達するための「道筋」を指す。具体的は「修行の基本」すなわち釈尊が最初に説いたとされる「八正（聖）道」を言う。以上4語が並列複合語を構成し, 全体の性・数・格は, mārgā のそれとなる。

jñānaṃ は, ここでは jñāna-「知ること」「理解すること」「知識」の中性・単数・主格で, 語根は √jñā-「知る」「理解する」である。prajñā-(f)「智慧」によって得ることも含まれると解する。

prāptir は, pra(pref.)「前方」+√āp-「到達する」「獲得する」+ti (動作名詞を作る接尾辞) で, prāpti-「達すること」「得ること」の女性・単数・主格。語尾の -s が, -s+ (有声音) >r と変化した。何を得るのか書いていないが, 恐らく「悟り」ないし「涅槃」であろう。nāprāptiḥ は, na+a+prāptiḥ で, 「得ないこともない」二重否定となる。語尾の -s が, 絶対語末で -ḥ となる。

❖ tasmāc Chāriputra aprāptitvena bodhisattvānām prajñāpāramitām āśritya viharaty acittāvaraṇaḥ.

【試訳】 シャリプトラよ, それ故に得ることがないために, 菩薩の般若波羅密多のお陰で, 人は心を覆うものは何もなく暮らしている。

tasmāc は, これも指示代名詞 tad- の中性・単数・奪格 tasmāt の副詞化で「それ故に」。2語が, 連声により -t+ś->-c+Ch- と変化した。aprāptitvena は, a-(pref.)「否定」+prāpti「得ること」+tva (抽象名詞化する接尾辞) で, aprāptitva-「得ることがないこと」の中性・単数・具格。これで理由を表す。

bodhisattvānām は, bodhisattva-「菩薩」の男性・複数・属格である。この部分は, viharaty の主語が「菩薩」か「人」かなど様々な議論がある。主語は書いてないが, viharati- から単数・第3人称・現在形であることは分る。大乘の利他の観点から「菩薩」を主語にせず, 「人」を主語にする説を採りたい。この「人」は, 菩薩でなくとも, 菩薩の般若波羅密多のお陰で, あらゆるものが「空性」という「特性」をもつことを知った人であろうから, 心を覆うものは何もなく, 恐怖もなく安住していると考えられる。

prajñāpāramitām は, prajñāpāramitā-「般若波羅密多」の女性・単数・対格である。続く āśritya は, ā-(pref.)「近接」+√śri-「頼る」+tya (絶対詞を作る接尾辞)「頼りにして」。ここでは「～のお陰で」と訳してみる。

viharaty は, vi-(pref.)「離れて」+haraty で, haraty は, harati の語尾が, 連声して -i + (異なる母音) >y と変化した。harati は, 語根が √hr-「取る」「奪う」である。ただし既述のように viharati は, 「暮らす」「住む」という意味である。

サンスクリット原文で『般若心経（大本）』を読む

acittāvaraṇaḥ は、まず acittā が、a-(pref.)「否定」+citta-(n.)「心」+ā-(pref.)「近接」で、合わせて「心の近くにない」。varaṇaḥ が、varaṇa-「覆うもの」の男性・単数・主格である。語尾が、絶対語末で -ḥ となる。合わせて「心を覆うものは何もなく」である。全体は、所有複合語で男性・単数・主格である。

❖ cittāvaraṇanāstitvād atrasto viparyāsātikrāṃto niṣṭhanirvāṇaḥ.

【試訳】 心を覆うものは存在しないので、恐怖もない。誤った見解から離れており、永遠の悟りに入っている。

前半の cittāvaraṇa については、上項参照。nāstitvād は、na「否定」+astitva-(n.)「存在」で、合わせて「存在しないこと」となる。その奪格 nāstitvāt が、連声して -t+（有声音）>-d となる。奪格で、原因・理由を表す。

atrasto は、a-(pref.) が「否定」、trasto が trasta-(pp.)「恐れている」の男性・単数・主格である。語根は √tras-「恐れる」「震える」である。全体として「恐れていない」「恐怖がない」となる。

viparyāsātikrāṃto の前半部分は、viparyāsa^atikrāṃto である。viparyāsa- は、vi-(pref.)「離れて」+pari-(pref.)「周って」+ā-(pref.)「こちらへ」+vas-「投げる」+a（名詞を作る接尾辞）。結局「転倒すること」「誤った見解」で、男性・単数・主格である。

atikrāṃto は、ati-(pref.)「過ぎて」+√kram-「歩む」の過去受動分詞で、atikrāṃta-「通り過ぎて」の男性・単数・主格である。全体の意味としては「誤った固定概念から離れている」。以上 3 語の語尾は、いずれも -as+（有声音）>-o と変化した。

niṣṭhanirvāṇaḥ は、niṣṭha+nirvāṇaḥ である。niṣṭha- は、ni-(pref.)「～の中に」+ṣṭha-(adj.)「～入って」。ṣṭha は、√sthā-「立つ」から派生した。これは、√sthā- の過去受動分詞 sthita- と同系である。手許の梵英辞典では、“standing, staying, being in”などの説明がある (Monier, p. 1262-3)。どちらも「～の状態にある」の意味である。

nirvāṇaḥ は、nirvāṇa-(pp.)「解放された」の男性・単数・主格である。語尾が、絶対語末で -ḥ となる。nirvāṇa- は、nir+vāṇa で、nis-(pref.)「～から離れて」は、有声音の前で nir と変化する。vāṇa-「吹きかけられた」「吹かれた」は、√vā-「吹きかける」の過去受動分詞である。意味は、「吹き消された」「消失・消滅した」状態をいう。合わせて「永遠の悟りに入っている」となる。nirvāṇa- は、漢訳文では音写で「涅槃」となった。

このような伝統的解釈に対して、「涅槃」という語には、本来「吹き消された」「消滅した」などの意味はなく、nir+√ṛ-「覆いをとる」を語源とすべきとする異説がある⁷⁾。ちなみに手許のパーリ語辞典によると nirvāṇa- の相当語 nibbāna の項目には、俗説としての「吹き消された」および「覆いのない」の両方が併記されている。

❖ tryadhvavyavasthitāḥ sarva-buddhāḥ prajñāpāramitām āśrityānuttarāṃ samyak-sambodhim abhisambuddhāḥ.

【試訳】 過去・現在・未来の三世の仏たちは、般若波羅密多によって、無上で正しい完全な悟りを得た。

元来 try は、tri-「三」で、異なる母音の前で i>y と連声した。adhva は、adhvan-(m.)「世」「時期」の複合語形。vyavasthitā- は、vi-(pref.)「離れて」+ava-(pref.)「遠離・下方」+√sthā-「居る」+ita (過去受動分詞を作る接尾辞)で、vyavasthita-「住んでいる」の男性・複数・主格である。vi- は、異なる母音の前で vy- に変化した。語尾は、連声により -s+ (s-) >-ḥ と変化した。次の sarva-buddhāḥ に掛かる所有複合語。

sarva-buddhāḥ は、sarva-(adj.)「すべての」+√budh-「目覚める」「悟る」+ta (過去受動分詞を作る接尾辞)で、sarvabuddha-「全ての悟った人」「仏」の男性・複数・主格。仏教では、釈尊出生前にも「悟り」を開いた仏が複数いると考える。過去の六仏に、釈尊および未来仏「弥勒仏」を合わせていう。まだ修行中なので、「弥勒菩薩」とも言う。原文は、単に「三世」だが、ここでは「過去・現在・未来」を補ってみる。

prajñāpāramitām は、prajñāpāramitā-「般若波羅密多」の女性・単数・対格である。続く āśritya は、ā-(pref.)「近接」+√śri-「頼る」+tya (絶対詞を作る接尾辞)で、「～を頼りにして」「～によって」。その語尾と次に続く anuttarāṃ の語頭が、連声により -a+a->ā と変化した。

anuttarāṃ は、an+uttarāṃ である。an-(pref.) が「否定」で、uttarāṃ が ud「上に」の比較級で「より上に」の女性・単数・対格である。合わせて「無上の」「これ以上ない」となる。

samyak-(adj.)「完全な」は、samyac の複合語形である。sambodhim は、sambodhi-「正しい目覚め」「正しい悟り」の女性・単数・対格である。

abhisambuddhāḥ は、abhi+sam+buddhāḥ で、abhi-(pref.) は、動作の方向を表し、sam-(pref.) は、「完成」を表す。buddhāḥ は、上で既に述べたのと同じように、過去受動分詞 buddha-「悟った」の男性・複数・主格。語尾の -s が、絶対語末で -ḥ となる。ここでは全体として「完全な悟りを得た」となる。

❖ tasmāḥ jñātavyaḥ prajñāpāramitāmahāmaṃtro mahāvīdyāmaṃtro 'nuttramāṃtro 'samasamamaṃtraḥ sarvaduḥkhaśāmanamaṃtraḥ

【試訳】 それ故に知るべきである。般若波羅密多の大いなる真言は、大いなる悟りの真言、最高の真言、比類のない真言、すべての苦しみを鎮める真言である。

tasmāḥ「それ故に」は、指示代名詞 tad- の中性・単数・奪格 tasmāt が、連声により -t+j->j+j- と変化した。奪格で理由を表す。続く jñātavyaḥ は、√jñā-「知る」+tavya (未来

サンスクリット原文で『般若心経（大本）』を読む

受動分詞を作る接尾辞)で, jñātavya-「知られるべきである」の男性・単数・主格で, 非人称である。ここでは能動態のように訳してみる。

prajñāpāramitāmahāmaṃtro は, prajñāpāramitā (f.)「般若波羅密多」+ mahāmaṃtro (m.)「大いなる真言」である。これと次の3つの maṃtro を同格の主語とする考えもあるが, ここではこれだけを主語にして残りを述語と考える。

mahāmaṃtro は, mahā+maṃtro で, mahā- は, mahat-(adj.)「大いなる」の複合語形である。これは, 「摩訶不思議」の「摩訶」のことである。maṃtro は, maṃtra-「真言」「呪文」「呪い」「祈り」の男性・単数・主格である。語尾は, 連声して -as+ (有声子音) >-o となる。

mahāvīdyāmaṃtro は, mahā「大いなる」+vidyā「知識」+maṃtra「真言」で男性・単数・主格。maṃtras の語尾は, 連声により -as+a->-o となる(語頭の a は脱落)。vidyā は, 「知識」すなわち prajñā-「智慧」によって「知った結果」なので, 「悟り」と訳してみる。

anuttaramaṃtro は, anuttara の語頭の a が, 連声により脱落したもの。an-(pref.)「否定」+uttara-(adj.)「より上に」+maṃtra-(m.)「真言」。結局 anuttara は「これ以上ない」「最高の」という意味となる。maṃtras の語尾は, 同様に -as+a->-o (語頭の a は脱落)。

asamasamaṃtraḥ は, 上記と同様に連声により, asamasama の語頭の a が脱落したが, 意味は脱落しない。a-(pref.) は「否定」, samasama は, sama-(adj.)「等しい」が繰返されたもの。合わせて「比類のない」の意味となる。

次に sarvaduḥkhaḥpraśamana-maṃtraḥ は, sarva+duḥkha+praśamana-maṃtraḥ である。sarvaduḥkha-(n.) は, sarva-(adj.)「すべての」+duḥkha-(n.)「苦悩」で, 「すべての苦しみ」。praśamanaḥ は, pra-(pref.)「前方に」「かなたに」+śamana-(adj.)「鎮める」。śamana- の語根は, √sam-「鎮める」である。すなわち praśamana-(m.n.)「かなたに鎮める」の男性・単数・主格である。maṃtraḥ は, 語尾の -s が, 絶対語末で -ḥ となる。

❖ satyam amithyatvāt prajñāpāramitāyām ukto maṃtraḥ, tad yathā,

【試訳】 真実にして嘘がないため, 般若波羅密多の時に, この真言は, 次のように誦まれる。

satyam は, satya-「真実」「真理」「真実の」の中性・単数・主格。amithyatvāt は, a-(pref.)「否定」+amithyatva-「嘘がないこと」の中性・単数・奪格で理由を表している。

prajñāpāramitāyām「般若波羅密多」は, 女性・単数・処格である。ukto は, √vac-「話す」の過去受動分詞で, ukta-「誦まれる」の男性・単数・主格。語尾が, 連声して -as+ (有声子音) >-o と変化した。maṃtraḥ は maṃtra-「真言」の男性・単数・主格で, 語尾の -s が, 絶対語末で -ḥ となった。tad は, 指示代名詞 tad-「それ」の中性・単数・主格 tat が連声変化したもの。yathā は接続詞で「次のように」。

❖ gate gate pāragate pāra-saṃgate bodhi svāhā.

【試訳】 行く人よ、行く人よ、彼岸に行く人よ。彼岸へ完全に行き着いた人よ。悟りよ、幸いあれ！

gate には、少なくとも3つの解釈がある⁸⁾。①√gam-「行く」「着く」の過去受動分詞 gata- の女性形 gatā-「行く人」の単数・呼格。② gati-「行くこと」の女性・単数・呼格。③過去受動分詞 gata- の男性・単数・処格で非人称絶対処格構文。なお①と②では、prajñāpāramitā (f.)「般若波羅密多」を「仏母」すなわち女性尊格として崇拝し呼びかける。

まず prajñāpāramitā (f.) と bodhi-(m.,f.)「悟り」を同一視してみる。次に bodhī を女性名詞の単数・呼格と見るならば、辻褄が合う。男性名詞ならば、どの数・格でも該当しない。従って文法的には上記①と②が正しいということになる。この呪文の箇所は、文法的には正規なサンスクリットではないとの説もある⁹⁾。主語も書かれていない。音写とするのが一番無難ではある。しかし①と②どちらでもいいが、ここでは①「行く人」を採用してみる。

したがって pāragate は、pāra-(adj.)「向こうへ」「彼岸に」+ gate「行く人」で、「彼岸に行く人」と解釈し、pāra-saṃgate は、pāra-(adj.) + saṃ-(pref.)「完成」+ gate で、「完全に彼岸に行き着いた人」と解釈する。いずれも女性・単数・呼格である。

svāhā は、祈祷の終わりに用いるもので、「幸いあれ！」である。手許の梵英辞典では、“Hail!” “Hail to!” “May a blessing rest on!” との説明がある (Monier, p. 1284-3)。

❖ evaṃ Śāriputra gaṃbhīrāyāṃ prajñāpāramitāṃ caryāyāṃ śikṣitavyaṃ bodhisattvena.

【試訳】 シャリプトラよ、深い般若波羅密多の修行の時には、菩薩はこのように学ぶべきである。

evaṃ は、副詞で「このように」。gaṃbhīrāyāṃ は、gaṃbhīra-「深い」の女性・単数・処格。caryāyāṃ は、caryā-「実行」「行為」の女性・単数・処格で、√car-「動く」「実行する」に由来する。ここでは「修行」のことである。śikṣitavyaṃ は、√sikṣ-「学ぶ」+ ityavya (未来受動分詞を作る接尾辞) で、śikṣitavya-「学ばれるべき」の中性・単数・主格。bodhisattvena は、bodhisattva-「菩薩」の男性・単数・具格である。合わせて「菩薩によって学ばれるべき」だが、ここでは能動態のように訳してみる。

❖ atha khalu bhagavān tasmāt samādhēr vyutthāyāryāvalokiteśvarasya bodhisattvasya sādhu-kāram adāt.

【試訳】 さて実にそれ故に、世尊が、瞑想から起き上がり、聖なる観自在菩薩への賛辞を与えられた。

atha「さて」と khalu「実に」は、副詞。bhagavān は、bhagavat-「世尊」の男性・単数・主格。tasmāt「それ故に」は、指示代名詞 tad- の中性・単数・奪格。奪格で理由を表す。

サンスクリット原文で『般若心経（大本）』を読む

samādher は, samādhī-「瞑想」の男性・単数・奪格 samādhes の語尾が, 連声して -s+ (有声音) >-r と変化したもの。

vyutthāyāryāvalokiteśvarasya は, vyutthāya + ārya + avalokiteśvarasya で, vyutthāya が, vi-ud-√sthā「起き上がる」の絶対詞。ārya は「聖なる」, avalokiteśvarasya は, avalokiteśvara-「観自在」の男性・単数・属格。bodhisattvasya は, bodhisattva「菩薩」の男性・単数・属格。sādhukāram は, sādhu + kāra の中性・単数・対格である。sādhu は, 不変化の形容詞で「まっすぐな」。kāram は, kāra-(m.f.n.) の中性・単数・対格で, √kr-「作る」が語源の可能性がある。幾つかの意味があるが, 「行為」(making, doing, working etc.) の意味であろう (Monier, p.274-2)。2語合わせると「賛辞」「感嘆の声」である。adāt は, √dā-「与える」のアオリストで過去を表す。

❖ sādhu sādhu kulaputra evam etat kulaputra.

【試訳】 その通りだ。その通りだ。立派な若者よ, まさにそのようだ。

sādhu は, ここでは「的を射ている」(leading straight to a goal; hitting the mark) という賛辞である (*Ibid.*, p.1201-2)。kulaputra は, 上述のように「立派な若者」。ここでの「立派な若者」は, 観自在菩薩を指す。evam は, 副詞で「まさに」。etat は, 指示代名詞 etad-の単数・中性・対格 etat が副詞化して「そのようだ」。

❖ evam etad gaṃbhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ cartavyāṃ.

【試訳】 まさにこのように深い般若波羅密多の時に修行がなされるべきである。

evam は, 副詞で「まさに」。etad は, 上述の etat が, -t+ (有声音) >-d と連声した。同じく副詞化して「このように」。gaṃbhīrāyāṃ は, gaṃbhīra-(adj.)「深い」の女性・単数・処格である。次の語を修飾する。

prajñāpāramitāyāṃ は, prajñāpāramitā-「般若波羅密多」の女性・単数・処格である。caryāṃ は, carya-「実行」「行為」の中性・単数・主格。cartavyāṃ は, √car-「実行する」+ tavya (未来受動分詞を作る接尾辞) で, cartavya-「実行されるべき」の中性・単数・主格。ここでは合わせて「修行がなされるべき」とする。

❖ yathā tvayā nirḍiṣṭam anumodyate tathāgatair arhadbhiḥ. idam avocad bhagavān ānaṃdamaṇaḥ.

【試訳】 汝によって説かれたように, 如来達や阿羅漢達によって一緒に受け入れられている。このように世尊は, 喜びの心で言われた。

yathā は, 接続詞で「～のように」。tvayā は, 「あなたによって」で人称代名詞 tvad- の第2人称・具格。nirḍiṣṭam は, nis-(pref.)「外に」+ √diś-「説く」+ ta (過去受動分詞を

作る接尾辞)で, nirdiṣṭa「説かれた」の中性・単数・主格。nis-は, 有声音の前で nir-と変化した。anumodyateは, anu-(pref.)「共に」+√mud-「喜ぶ」の受動態である。

tathāgatairは, tathāgata-「如来」の男性・複数・具格で, 語尾の-sが, 有声音の前で-rに変化した。tathāgata-には, tathā(adv.)「そのように」+gata-(pp.)「行った」>tathāgata-と tathā(adv.)「そのように」+ā-(pref.)「こちらに」+gata-(pp.)「来た」>tathāgata-との2つの可能性がある。「如来」は, 修行を完成し, 悟りを開いた人。

arhadbhiḥは, arhat-「阿羅漢」の男性・複数・具格。語尾の-sが, 絶対語末で-ḥとなる。「阿羅漢」は, 煩惱を完全に滅した人で, 尊敬や施しを受けるに値する人。

idamは, 上述の etadと同様, 本来指示代名詞であるが, 副詞化して「このように」。avocadは, √vac-「言う」の第3人称・単数・アオリストで過去を表す。語尾-tが, 有声音の前で-dとなる。bhagavānは, bhagavat-「世尊」の男性・単数・主格。

次にテキストの ānaṃdamanaは, 前後関係から ānaṃdamanaḥの誤りと考えられる。これは ānaṃda+manaḥで, ānaṃda-(m.)が「喜び」, manaḥは manas-(n.)「心」, 合わせて「喜びの心」。語尾が, 絶対語末で-ḥとなる。ānaṃdamanaḥは, 本来中性だが, 所有複合語として, 前の男性名詞 bhagavānを修飾するため, 男性・単数・主格となる。

❖ āyuṣmān Chāriputra āryāvalokiteśvaraś ca bodhisattvaḥ sā ca sarvāvātī parṣat sadevamānuṣāsura gaṃdharvaś ca loko bhagavato bhāṣitam abhyaṇamdann iti

【試訳】長老シャリプトラと聖なる観自在菩薩, そしてその他すべての集会, および神, 人間, 阿修羅, ガンダルヴァを含む世界の人達は, 世尊の言葉に歓喜した。

まずテキストの āyuṣmānは, āyuṣmānの誤りと考えられる。最初の2語は, āyuṣman(m.sg.N.)「長老」の語尾と Śāriputraḥ(m.sg.N.)「シャリプトラ」の語頭が, 連声により-n+ś->-ñ+Ch-と変化したもの。Chāriputraは, 語尾の-ḥが脱落した。すなわち-aḥ+a以外の母音>-a+母音である。

āryāvalokiteśvaraśは, āryāvalokiteśvara-「聖なる観自在」の男性・単数・主格の語尾が, 連声により-s+(c-)>-śと変化した。caの後の bodhisattvaḥと一体となる。bodhisattvaḥは, bodhisattva-「菩薩」の男性・単数・主格。語尾の-sは, 絶対語末で-ḥとなる。sāは, 指示代名詞 tad-「それ」の女性・単数・主格の形容詞的用法。sarvāvātīは, sarvāvāt-(adj.)「すべてを含む」の女性形・単数・主格。parṣatは, parṣad-「集会」「会衆」の女性・単数・主格。内容は複数でも, 単語としては集合名詞で単数となる。既に述べた saṃgha-(m.)「僧伽」と同じである。

sadevamānuṣāsura gaṃdharvaśは, sa+deva+mānuṣa+asura+gaṃdharvaśで, sa(pref.)は「～を伴う」, deva-(m.)は「神」, mānuṣa-(m.)は「人間」, asura-(m.)は「阿修羅」である。阿修羅は, 六道の一つである阿修羅道の主で, その闘争的性格から五趣の人

サンスクリット原文で『般若心経（大本）』を読む

と畜生の間に位置する。gaṃdharvaś は gaṃdharva-「ガンダルヴァ」の男性・単数・主格。語尾の-sが、連声して-s+(c-)>-śと変化した。ガンダルヴァは、インド神話など種々な説明があるが、「仏教では、天の楽師。天にあって音楽を奏でる神。酒肉を食べず、ただ香を求めるだけなので尋香ともいい、緊那羅とともに帝釈天に侍して伎楽を奏でる」（『広説佛教語大辞典』p.241）。漢訳では「乾闥婆（げんだつば）」などという。この部分は、全体で所有複合語として loko を修飾する。loko は、語根が √lok-「見る」で、loka-「世界」「世間」「世界の人々」の男性・単数・主格。語尾が、連声して-as+(有声音)>-oと変化した。

bhagavato は、bhagavat-「世尊」の男性・単数・属格 bhagavataḥ の語尾が、-aḥ+(有声音)>-oと変化したもの。bhāṣitam は、√bhāṣ-「語る」+ita（過去受動分詞を作る接尾辞）で、bhāṣita-の名詞化「語られるもの」すなわち「言葉」の中性・単数・対格。abhyanaṃdann は、abhi+anaṃdann で、abhi-(pref.)は「～に向かって」、anaṃdann は、√nand-「歓喜する」の第3人称・複数・アオリスト。語尾は、連声により-n+(母音)>-nnとなった。iti(adv.)は、色々な意味があるが、ここでは引用符に準ずるものと解釈する。

❖ prajñāpāramitāhṛdayasūtram samāptam.

【試訳】『般若心経』が完結した。

prajñāpāramitāhṛdayasūtram は、prajñāpāramitā-(f.)「般若波羅密多」+hṛdaya-(n.)「心」「心臓」+sūtram-(n.)「お経」の複合語で、中性・単数・主格である。直訳的には『般若波羅密多の心のお経』であるが、日本では『般若心経』という名称がよく知られているので、これを採用する。なお英語語源辞典によれば、hṛdaya「心」「心臓」は、英語の heart および core と同じ語源を共有すると見られる¹⁰⁾。

samāptam は、sam-(pref.)「完成」+√āp-「達する」+ta（過去受動分詞を作る接尾辞）で、āpta-「完結した」の中性・単数・主格である。

4. 日本語訳の試み

全知の人に礼。

このように私は聞いた。

ある時世尊は、ラージャグリハ近くの霊鷲山に、大勢の修行僧達および大勢の菩薩達とともに居られた。

実にその時、世尊は深遠な悟りと呼ばれる瞑想に入った。

するとその時、聖なる観自在菩薩摩訶薩は、

深い般若波羅密多の時に修行を実践しながら、このように見極めた。

五つの要素がある。そして彼は、それらがその本性において空であると見抜いた。

そこで、長老シャリプトラは、仏の力によって聖なる観自在菩薩に次のように言った。
誰であれ、立派な若者で深い般若波羅密多の時に修行をしたいと願った者は、どのように学んだらよいであろうか？

このように言われて、聖なる観自在菩薩摩訶薩は、長老シャリプトラに次のように言った。
シャリプトラよ、誰であれ、立派な若者あるいは立派な娘で深い般若波羅密多の時に修行をしたいと願った者は、このように見極めるべきである。

五つの要素がある。そして彼あるいは彼女は、それらがその本性において空であると見抜いた。

物質は空性であり、空性とは物質に他ならない。

空性は、物質と別々ではない。また物質は、空性と別々ではない。

物質なるもの、それは空性である。空性なるもの、それは物質である。

このように感知作用・知覚作用・意志作用・認識作用もまた空性である。

シャリプトラよ、このようにあらゆるものは、空性という特徴をもつ。

それらは生ずることもなく滅ぶこともない。汚れていることもなく浄いこともない。減ることもなく増えることもない。

シャリプトラよ、それ故にその時空性において物質はなく、

感知作用・知覚作用・意志作用・認識作用もない。

眼・耳・鼻・舌・身体・心もなく、物質・音・匂・味・触・心の対象もない。

眼に映る世界はない。さらに心の世界もなく、心の対象の世界もなく、

心の認識の世界に至るまでない。

悟りは、存在しない。迷いや煩惱も存在しない。これらがなくなることもない。

さらに老いと死に至るまでない。老いと死に至るまでなくなることもない。

苦悩・根源・抑制・道筋は存在しない。知ることがなければ、得ることがない。得ないこともない。

シャリプトラよ、それ故に得ることがないために、菩薩の般若波羅密多のお陰で、人は心を覆うものは何もなく暮らしている。

心を覆うものは存在しないので、恐怖もない。誤った見解から離れており、永遠の悟りに入っている。

過去・現在・未来の三世の仏たちは、般若波羅密多によって、無上で正しい完全な悟りを得た。

それ故に知るべきである。般若波羅密多の大いなる真言は、大いなる悟りの真言、最高の真言、比類のない真言、すべての苦しみを鎮める真言である。

真実にして嘘がないため、般若波羅密多の時に、この真言は、次のように誦まれる。

行く人よ、行く人よ、彼岸に行く人よ。彼岸へ完全に行き着いた人よ。悟りよ、幸いあれ！

サンスクリット原文で『般若心経（大本）』を読む

シャリプトラよ、深い般若波羅密多の修行の時には、菩薩はこのように学ぶべきである。さて実にそれ故に、世尊が、瞑想から起き上がり、聖なる観自在菩薩への賛辞を与えられた。その通りだ。その通りだ。立派な若者よ、まさにそのようだ。

まさにこのように深い般若波羅密多の時に修行がなされるべきである。

汝によって説かれたように、如来達や阿羅漢達によって一緒に受け入れられている。このように世尊は、喜びの心で言われた。

長老シャリプトラと聖なる観自在菩薩、そしてその他すべての集会、および神、人間、阿修羅、ガンダルヴァを含む世界の人達は、世尊の言葉に歓喜した。

『般若心経』が完結した。

5. 英語訳の試み

Bow to the omniscient! I heard as follows:

Once Buddha stayed together with a great number of mendicants and a large number of seekers after truth in the Gridharakuta Mountain near Rajagriha. Then indeed Buddha started meditation called deep enlightenment.

And next while holy and great Avalokitesvara bodhisattva was performing the practices in the deep prajnaparamita, he perceived as follows: There are five elements. And he ascertained that they are all empty by their nature.

Then Shariputra told holy Avalokitesvara by the virtue of Buddha as follows: How should any decent lad who wishes to perform the practice in the deep prajnaparamita learn?

As holy and great Avalokitesvara was asked, he answered Shariputra like this. Shariputra, any decent lad or lass who wishes to perform the practice in the deep prajnaparamita should consider thus. There are five elements. And he or she ascertained that they are all empty by their nature. Material is emptiness and emptiness is surely material; emptiness is not different from material and material is not different from emptiness. What is material is emptiness, and what is emptiness is material. Thus sensing, imagining, willing and recognizing are also emptiness.

Shariputra, so all things are characterized by emptiness: they do not appear and they do not disappear; they are neither impure nor pure; they do not decrease or increase.

Shariputra, therefore, in emptiness, then there is no material and no mental activity: sensing, imagining, willing, recognizing; no sense organs: eye, ear, nose, tongue, body, or mind. There are neither such objects of sense organs as material, sound, odor, taste,

touch, and objects in mind, nor eye realm, nor mind realm, nor anything up to recognition realm in mind.

Enlightenment does not exist. Nor does ignorance. Neither of them disappears. There is nothing up to aging or death; there is no extinction up to aging or death. There are no agony, no cause, no control and no course. Accordingly, there is no gaining without knowing. There is no not gaining, either.

Shariputra, because there is nothing to attain, therefore, a man lives without what covers his mind thanks to the prajnaparamita by the bodhisattva, and accordingly nothing covers his mind and so he is free from fear. He is overcoming dreamlike delusion and attaining to the ultimate Nirvana.

All Buddhas in the past, present and future have properly awoken through their prajnaparamita and attained to the great, right and perfect enlightenment.

Therefore one should know that the grand spell of prajnaparamita is the great spell of enlightenment, the ultimate spell, the peerless spell and the spell which allays all pains; because it is truth and no falsehood, the spell is chanted in the prajnaparamita as follows: "Goer, goer, goer approaching the other shore, and goer who has completely landed on the other side. Congratulations on the enlightenment!" Shariputra, in the practices for the deep prajnaparamita, a bodhisattva should learn thus.

Just then, therefore, Buddha woke up from the meditation and paid the tribute of praise to holy Avalokitesvara Bodhisattva. That's right! That's right! Decent lad! That's like so! The practices should be performed in the deep prajnaparamita like that.

As you preached, it is accepted by both tathagatas and arhats. Buddha told delightedly thus. Shariputra, holy Avalokitesvara Bodhisattva and all the people in the world including crowds, gods, human beings, Asura and Gandharva got full of joy.

The Prajnaparamita Heart Sutra was completed.

注

- 1) Max Müller (1823-1900) は、ドイツ生まれで後イギリスに帰化した、文献学・東洋学・比較言語学・仏教学などの研究者である。ドイツのライプツヒ (Leipzig) 大学を卒業している。梵英辞典で有名な Sir Monier Monier-Williams (1819-1899) は、オックスフォード大学教授として同僚でありライバルであった。日本の佛教学者南条文雄 (1849-1927) は、梵語を学ぶためオックスフォード大学で彼に師事した。日本にある『般若心経』〈大本〉〈小本〉両方の校訂英訳を行った。
- 2) Edgerton, p. 504 には、lives, dwells, spends one's time と記載がある。

サンスクリット原文で『般若心経（大本）』を読む

- 3) 岩本『日本佛教語大辞典』p. 596には「智慧によりこの世に存在するものはすべて「空」であるという認識に到達した悟りの境地をいう」と説明がある。
- 4) 他の辞典・文献などでは「善男子」「善財童子」の訳もあるが、現代日本社会では馴染まない言葉だろう。
- 5) 漢訳は、それぞれ「受」「想」「行」「識」だが、説明を受けないと、これだけではとても内容を理解できない。後述の「集」も同様である。
- 6) 宮坂『真釈般若心経』pp. 160-162。
- 7) 松本『縁起と空』pp. 194-211 および宮坂、前掲書、pp. 188-192。
- 8) ①中村・紀野『般若心経・金剛般若経』pp.36-37 参照。①と②原田『「般若心経」成立史観』p. 354 参照。③鈴木『般若心経』pp. 9-11 参照。
- 9) 中村・紀野、前掲書、p. 36。
- 10) Onions などによると印欧語族の語源として kerd や krd があり、gherd を経て、ヨーロッパでは、英語の heart 系と core 系とに分かれたと見られる。heart と同系が、独語 Herz、蘭語 hartje など、core と同系には希語 ker、仏語 cœur、伊語 cuore、西語 corazon などがある。いずれも「心」「心臓」という意味である。

参考文献・参考辞典

- 梶山雄一（1992）『空入門』春秋社
- 勝又俊教・古田紹欽編（1999）『大乘仏典入門』大蔵出版
- 金沢 篤（2010）「梵文『般若心経』（小本）の「空」」
『駒沢大学仏教学部研究紀要』68号
- （2011）「色即是空、空即是色の論理—梵文『般若心経』（小本）の「空」（2）—」
『インド論理学研究』第2号
- 上村勝彦・風間喜代三（2010）『サンスクリット語・その形と心』三省堂
- ゴンダ、J. 著 鏗淳訳（2009）『サンスクリット語初等文法』春秋社
- 佐々木教悟他（1966）『仏教史概説インド篇』平楽寺書店
- 鈴木勇夫（1980）『般若心経の研究』中部日本教育文化
- 高崎直道（1991）『唯識入門』春秋社
- 田上太秀（2011）『図解ブツダの教え』西東社
- 立川武蔵（2001）『般若心経の新しい読み方』春秋社
- 玉城康四郎（2003）『華嚴入門』春秋社
- 辻直四郎（1974）『サンスクリット文法』岩波書店
- 中村 元（2001）『仏典をよむ3 大乘の教え（上）』岩波書店
- （2001）『仏典をよむ4 大乘の教え（下）』岩波書店
- （2002）『龍樹』（学術文庫）講談社
- 中村元・紀野一義訳注（2001）『般若心経・金剛般若経』岩波書店
- 西嶋和夫訳（2006）『中論〔改訂版〕』金沢文庫
- 早島鏡正他（1982）『インド思想史』東京大学出版会
- 原田和宗（2010）『「般若心経」成立史観』大蔵出版
- 平川 彰（1992）『仏教入門』春秋社

- 正木 晃 (2011) 『般若心経』 西東社
松長有慶 (1991) 『密教』 岩波書店
松本史朗 (1989) 『縁起と空』 大蔵出版
宮坂宥洪 (2004) 『真釈般若心経』 角川書店
三井昌史 (1926) 『新訳大品般若経』 甲子社書房
大崎正瑠 (2013) 「サンスクリット原文で『般若心経』を読む」『総合文化研究』
岩本 裕 (1988) 『日本佛教語辞典』 平凡社
雲井昭善 (1997) 『パーリ語佛教辞典』 山喜房佛書林
寺澤芳雄編 (1997) 『英語語源辞典』 研究社
中村 元 (2001) 『広説佛教語大辞典』 東京書籍
荻原雲来編 (1986) 『漢訳対照梵和大辞典』 講談社
Edgerton, Franklin (2010), *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, New Haven
Monier-Williams, Sir Monier (2008), *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford: OUP
Onions, C.T. ed. (1996), *The Oxford Dictionary of English Etymology*, Oxford: OUP

後 記

梵語と漢語とは全く異なる言語体系のため、漢訳文には正確に訳されていないところがある。たとえば漢文では、品詞の区別がしばしば困難、名詞・形容詞の性・数・格の区別が無い、時制・態の区別が不明瞭、その他分詞・関係代名詞などが正確に表されないため、漢訳文にはかなり無理がある。これらが直接梵語を読んだ方が良い理由である。個人的な感覚だが、日本語への直訳は、漢訳よりは近く、そして英語が梵語と同族のため、英語訳はさらに近いと感じる。さて高齢者になり仏教と梵語を始めたが、怖いもの知らずに無謀なことをした感がある。これまで「小本」について小論も書いたが、あちこちで未熟さを露呈したと思われる。今回の「大本」については、「小本」の経験・教訓を生かして、多少は増しになったかもしれない。しかし決して完璧ということはない。引き続き読者・識者の叱正をお願いしたい。